

二〇二六年 一月三〇日

入学 試験 問題

国 語

著作権の都合上、省略しています。

著作権の都合上、省略しています。

著作権の都合上、省略しています。

著作権の都合上、省略しています。

著作権の都合上、省略しています。

著作権の都合上、省略しています。

著作権の都合上、省略しています。

作権の都合上、省略しています。

著作権の都合上、省略しています。

著作権の都合上、省略しています。

著作権の都合上、省略しています。

## II

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。解答は、解答用紙の

17

から

25

までにマークせよ。

〈かたり〉という言葉行為は、独特のかたちで、時間にかかわる。(〈はなし〉とちがって)、〈かたり〉の行為においてかたられ、対象となるのは、主として過去のできごとである。平家の滅亡についてあるまとまった物語をかたったり、あるいは、幼年時代や学生時代の思い出についてかたり合ったりするのは、あらためて説くまでもなく、〈かたり〉という言葉行為もっとも普通のありかたであるといっていよう。

〈むかしがたり〉という古いことばがあるが、右に述べたような次第で、近い〈むかし〉も遠い〈むかし〉も含めて考えれば、およそ、〈かたり〉は、一般に〈むかし〉にかかわるといえることができるかもしれない。そして、〈かたり〉がかかわる過去は、たんなる過去一般ではなくて、とりわけて、ある独特の様相を帯びた過去である。

このことは、<sup>A</sup>〈かたり〉は〈むかし〉という独特の位相の過去にかかわる、あるいは、逆に、より立ち入っていえば、〈むかし〉という独特の位相の過去にかかわることが、〈かたり〉という言葉行為をそれとして特徴づけあるいは特殊化する、ということができらるだろう。

それは、どういうことだろうか。

ひと口におなじく過去といっても、すこしあらためて考えてみればすぐにわかるように、<sup>B</sup>〈むかし〉は、たんなる〈いにしへ〉や〈来し方〉とはちがう。早い話、〈いにしへ〉(往にし方)―〈行く先〉(先行き)、〈来し方〉―〈行く末〉、という、過去―未来のシンメトリーをなす表現を、われわれはただちに思い浮かべることができ、〈むかし〉にたいして同様のシンメトリーをなすべき未来に関する表現を仮に思い浮かべようとつとめてみると、一見容易なように見えて、手持ちのヴォキャブラリーのあれこれをごころのうちに探ってみても、いわば〈むかし〉という語のもつ意味論的力能とでもいったもののおのずからなる厚い壁に繰り返しはねつけられるおもいを空しく味わうのがおちだろう。

〈むかし〉には、〈いにしへ（往にし方）〉―〈行く先〉（〈先行き〉）、〈来し方〉―〈行く末〉というペアに対応してそれと対をなすような未来に関する表現ないし語は存在しない。そうではなくて、これもすこし考えてみればあまりにもあきらかなように、〈むかし〉に対立すべき、また現にしばしば対立して使われもする表現は、たとえば〈むかしといま〉という言葉の方からもあきらかなように、むしろ、〈いま〉である。

〈むかしばなし〉と聞けば、（ちなみに、わが国の〈むかしばなし〉の口頭伝承の世界では、単に〈むかし〉といつて〈むかしばなし〉を意味する場合がしばしばあることは、周知のごとくである。〈むかし〉<sup>C</sup>は、はなされ、かたられることによつて、はじめて〈むかし〉となり、〈むかし〉であることの暗黙の了解が、こうした表現の背後にあるといつてもよいかもしれない）、多少とも日本語の語感に親しみのあるほどのひとならば、それが、単なる一般の〈はなし〉でも、また単なる〈いにしへ〉や〈こしかた〉<sup>B</sup>についてのはなしでもなくて、ある独特のジャンルの〈はなし〉にほかならぬこと、すなわち、ア といえば、それが、（むしろ、〈身の上ばなし〉の類とも似て）、たとえそれが現実の過去のできごとに関するはなしであったとしても、そこに何らかの潤色が介入し、いわばある独特の時間と存在の次元をその対象ないし志向的相関者としてもつものであることを、ただちに了解するだろう。

「いまはむかし」という、古く〈むかしばなし〉あるいは〈むかしがたり〉の導入のひとつの定形として使われたお馴染みの表現がある。この表現もまた、期せずして、〈いま〉と〈むかし〉が、（すこし先を越していえば、時間の絶対的な不可逆性、あるいは、絶対的な不可逆性を帯びた時間、にかかわる）、いわば質的にへだてられた不連続な時間の秩序に属するという暗黙の了解が、その背後にあることを示しているだろう。「むかしをいまにかへさばや」という、〈むかし〉という次元に属する時間の絶対的な不可逆性にあえてさからわんとする願望ないし祈願は、<sup>注一</sup>「むかしをいまにかへす」〈かたり〉のこ  
とばや、また〈ふり〉しぐさのあれこれに、<sup>D</sup>一種独特のあえていえば神話的なアウラを帯びせしめることになる。こうした〈むかしがたり〉の境域においては、たとえそれが比較的近い〈むかし〉にかかわるものであろうとも、すべての形象は、

それがいわば〈むかし〉のうちに繰り込まれるに依じて、<sup>注一</sup>プルーストの回想の世界におけるがごとくに、すでになにほどこかの神話的色合を帯びる。

イ といえば、〈むかし〉に対立し、対比される〈いま〉は、単に、過去―現在―未来というときの、通常の常識的とされる時間理解において、過去と未来の持続に対比されるいわば点的な現在ないし現在時点ではない。何よりの証拠に、これもすこし考えてみればあまりにもあきらかな事実として、われわれは、普通、〈いにしへ〉(往にし方)―〈行く先〉(先行き)、〈来し方〉―〈行く末〉というようにはいが、たとえば、〈いにしへ〉―〈いま〉、〈いま〉―〈行く末〉というように対応してことばを使ったり、まして、「来し方、行く末」という場合のように、それらを熟して使ったりということは絶えてすることがない。

ウ といえば、〈いま〉は、あくまで、〈むかし〉と対立・対比して使われるのが常道である。

ということは、〈むかし〉と対立する〈いま〉は、いま近代物理学の時間についての教養をしばらく脇におき、括弧に入れていえば、けっして、過去―現在―未来という持続の幅をもたない点的な現在や現在時点ではなく、むしろ、〈いにしへ〉から〈行く先〉、あるいは、〈来し方〉から〈行く末〉までをもはるかに含めた幅をもった一種の体験流として理解されるということの意味するところと解することができる。日本語にいう〈いま〉は、したがって、単なる、過去、未来と対立し持続の幅をもたぬ点的な現在ないし現在時点を意味するのではなく、むしろ、有名な『告白』<sup>注三</sup>十一章におけるアウグスティヌスの時間分析にいうような<sup>E</sup>〈過去の現在(現前)〉、〈現在の現在〉、〈未来の現在〉の三つの相ないし次元をともに合わせ含みこんだひとつの総合的な時間理解ないし体験流のありかたを元来指示していると解するべきだろう。

(坂部 恵 『かたり』一部変更)

注一 アウラ・・・ある人や物から発せられる霊気、独特の雰囲気。オーラ。



問三 傍線部Bに「〈むかし〉は、たんなる〈いにしへ〉や〈来し方〉とはちがう」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄

19

19 にマークせよ。

① 〈むかし〉は、〈いにしへ〉や〈来し方〉と比べて、それが持つ辞書的な意味を正確に捉えることが容易な用語ではないということ

② 〈むかし〉は、〈いま〉と対になるが、〈いにしへ〉―〈来し方〉のように過去―未来ではなく、過去―現在の関係であるということ

③ 〈むかし〉は、〈いにしへ〉や〈来し方〉の持つ対称表現がないが、人それぞれが想像する言葉でそれは代用可能であるということ

④ 〈むかし〉は、〈いにしへ〉や〈来し方〉のように、過去―現在―未来という垂直的な時間の流れの中での一地点でないということ

問四 傍線部Cに「〈むかし〉は、はなされ、かたられることによって、はじめて〈むかし〉となり、〈むかし〉であること  
の暗黙の了解が、こうした表現の背後にあるといってもよいかもしれない」とあるが、それはどういうことか。その説  
明として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄

20

20

① 〈むかし〉は、〈かたり〉という行為を通してその存在意義や特性を得るものであり、物理的時間軸に位置  
する時間概念ではない。

② 〈むかし〉は、〈かたり〉において、〈いにしへ〉や〈来し方〉とは違ったしかたで現在・未来とつながっ  
ている時間概念である。

③ 〈むかし〉は、歴史的な記録や文献に基づき定義づけられるもので、〈かたり〉の中でその意味が変化して  
いく時間概念ではない。

④ 〈むかし〉は、〈かたり〉により伝承されることで本来の意味を失っていくもので、個人の記憶にのみ存  
在する時間概念である。

問五 傍線部Dに「一種独特のあえていえば神話的なアウラを帯びせしめる」とあるが、それはどういふことか。その説明

として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 21 にマークせよ。

21

① 〈むかし〉が〈かたり〉を通して伝えられていくうちに、次第に事実とは異なる誇張や脚色が加わり、〈いま〉現在とは別世界の物語へと変化するということ

② 〈むかし〉の出来事が〈かたり〉を通して口承されると記憶が徐々に薄れていき、〈いま〉改めて語られることでそこに幻想的な雰囲気加わるということ

③ 〈むかし〉が〈かたり〉によって〈いま〉として呼び起こされることで、単なる事実を超えた象徴的な意味や普遍的な価値を備えるようになるということ

④ 個人の〈むかし〉の記憶が〈かたり〉によって文学的な作品となれば、時間的な制約を超えて、〈いま〉において普遍的な共感を呼ぶようになるということ

問六 傍線部Eに〈いま〉は「〈過去の現在（現前）〉、〈現在の現在〉、〈未来の現在〉」の三つの相ないし次元をともにあわせて含みこんだひとつの総合的な時間理解ないし体験流のありかた」であるとあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄

22

22

① 〈いま〉とは、時間の絶対的な不可逆性を受け入れ、もはや過去をかえりみず未来へと向かう「先」を見据えた時間概念である。

② 〈いま〉とは、科学的測定にもとづき、過去と未来を明確に区別する客観的な時点を指し示すものとして機能する時間概念である。

③ 〈いま〉とは、時間軸上の一地点でなく、過去から未来への流れを支える、幅を持つ「場」のようなものとして働く時間概念である。

④ 〈いま〉とは、過去の出来事が未来に向けて絶えず変化し、その意味が更新される、一つの流動的な過程を指し示す時間概念である。

問七 筆者の主張について説明した次の文章を完成させるよう、各欄に入る最も適切な選択肢を一つずつ選び、その記号を

解答欄

23

から

25

にマークせよ。

〈いま〉と〈むかし〉は、三部構成の過去・現在・未来のような直線上の 23 時間概念とは違うものである。  
 〈むかし〉は、単なる過去ではなく、〈かたり〉のなかで〈いま〉かたられるたびに 24 され、過去の事実以上の特別な意味を付与される。これが 25 である。

23

① 記憶

24

② 神話

25

③ 修正

④ 伝承

⑤ 再生

⑥ 体験流

⑦ 連続的な

⑧ 非連続的な

⑨ 不可逆的な



# MEMO

---

